
彼は王子さまっ！

黒崎一花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼は王子さまっ！

【Nコード】

N8378J

【作者名】

黒崎一花

【あらすじ】

高2にもなつて、まだシンデレラに憧れてます！重度の空想癖を持つ倉坂叶。くらさかかなえ叶の彼は、表は文武両道、才色兼備、その上性格もいい史上最高の王子様、王川碧。きみかわりくでも実は裏の顔もある彼。それはDSでわがまま放題の王子だった！そんな王子様にに振り回される、一人のシンデレラの恋物語――

プロローグ シンデレラはわがまま王子に告白する（前書き）

黒崎一花、人生初の恋愛小説に挑戦です！

相変わらずの駄文ですが、楽しんでいってくださいね。

プロローグ シンデレラはわがまま王子に告白する

はじめまして、こんにちは。

私は倉坂叶^{くらさかなえ}。鷹ノ峰高校^{たかのみね}2年生。

よく空想癖がある、なんて友達に言われちゃうけど、ごくごく普通の女子高生です！

……やっぱウソはダメですか？いえ、空想癖のことなんですけど。他は嘘偽りのない、純粋な真実です。

空想癖、そこまでひどいとは思ってないんですが、告白しましょう。私、高1にもなって、シンデレラに憧れるんです。

女の子なら、誰もが憧れたことのあるヒロインだと思うんですが……高1で憧れて何が悪いッ！……最近この話題について、開き直る癖が出てまいりました。

さて、ここらで本題に……

私の彼氏、紹介します！

名前は王川碧^{きみがわりく}。ごく普通の私（まあ空想癖はあるけど）と見事につりあわないんだけど、顔は超イケメンだし、勉強、スポーツ、どれもトップレベル。超モテモテなのに、性格も優しく、その上、家は超大金持ちのセレブ。とにかく彼氏にしたら最高！

……のはずだった。

なんかブルーになってきた……

取りあえず、私と碧の出会いを話そう。

二週間前

私は、王川くんに思い切って告白しようと、校舎裏に王川くんを呼び出した。

王川くんはちゃんと来てくれた。私の顔がほてっているのに気がついて、

「どうしたの？倉坂さん、顔、赤いよ？」

と、声をかけ、私の顔を覗き込んだ。

王川くんに顔を覗き込まれた上、そんな優しい言葉をかけてもらったおかげで、私の頬はどんどん赤くなっていく。

私の顔、今、りんごみたいになってんだろっな……ああ、もう限界！

「王川くん！わ、私、実は、王川くんが……」

「好きッッ……！」

小さく叫ぶように、そして何よりも高ぶる思いをこめて、自分の気持ちを素直に吐き出した。

うん。いいもん。フられてもともとだし！思ったこと言えただけでもよかったよね！

私はこれで十分満足――

「ふーん。あんたが告って来るなんてなア。全然そうは見えねーのに」

はい、頭の整理開始――！！

え？今の気だるそうなセリフ……まさかね？王川くん？じゃないよね？そうだよ。王川くん、超紳士だもん。男子生徒の鏡だもん！こんなセリフ言はずないよね！疑ってゴメンネ！

と、王川くんが私のあごを手でくいと持ち上げる。私の顔は、カァッ^ッと赤くなった。だって、王川くんの整った顔が目の前にあるんだもん。

「へえ。顔はまあまあみてーじゃねーか。んで、どうすんの？具体的に」

「ぐ、具体的につて………?」

王川くん、まさかとは思ったけど、結構裏表あったりするキャラなの? いや、ちょ、これ、この王川くんの変わりよう、追っかけの女子が見たら、間違いなく数名は失神すると思うけど………

「バカ? お前」

ガーン!!! バツバカ!? ま、まさか王川くんにバカなんてこと言われるなんて………!

私がショックを受けている間にも、王川くんが甘い声で言う。

「じゃ、何のために告白したつもり? 俺と付き合いたいんでしょ?」

「そ、それは………」

確かにそうなればすごく嬉しいけど、そんな直球ストレートで言われても………

「どっち? 付き合うの? 付き合わないの? お願いします、王子様って言ってみるよ。言っとくけど、俺、両思いとか中途半端な関係、大っ嫌いだから」

王川くんがニッと笑う。昔こないたずら坊主近所にいたなあ、なんてのんきにされてられない!

てゆーか、付き合う付き合わないのつて、王川くんに選択権あるんだよね!? そのための告白だもんねえ!? なんのになんで私が選ばなきゃだめなの!? それもこんな脅迫じみた形で!!!!

えーい!!! こうなったら、当たって砕けろおー!!!

「つつ付き合ってください!」

「お願いします?」

「お………」

——こうして、私は、表はとってもステキな、お相手はシンデレラですか? な王子様、裏はちょい腹黒DSな王子様とお付き合いすることになりました。

ブローグ シンデレラはわがまま王子に告白する（後書き）

いかがでしたか？

次こそ王子様本領発揮！・・・・なるのかなあ？

感想いただけたら、とっても喜びます。

第1話 シンデレラは数学が苦手です(前書き)

久々の更新。プロローグでとまってたことにびっくりデスww
では、どーぞ！

第1話 シンデレラは数学が苦手です

びびっ びびっ

「ん…………あと5分…………」

「んで結局起きらんねーんだろ？叶は。ったく…………起きねーなら、髪の毛ライターで燃やすぞ」

「やめてよお……………つるっさいなあ……………」

！？

あれ？私、お兄ちゃんいたっけ？弟いたっけ！？お父さんいたっけ！？！？あ、お父さんはいるわ。

「つきやあああああ！」

「なんだよ。人がせつかく起こしに来てやったつてのに」
目の前にいたのは――

片手にライター持った王川くん。

「なななな、何してんのー！？」

あ、だめだ。人間、予想外の展開怒ると、平常心失うもんだな。これほどまでに空想癖を持つ私でも。

「ん？お前が何回言っても遅刻ギリギリで登校するから起こしに来たんだよ。感謝しろよ？俺がいなかったら、お前、あと30分は寝てたろ？」

「うっ」

……………悔しいけど、ほんとです。

にしても……………なんで？なんで王川くんが私の家知ってんの？

「あ、家な」

！？読心術か！？読心術でも兼ね備えてんのじゃ！？さすがなのな！さすがは自称王子なのな！

「王川グループの情報網を使えば、このくらいスーパーの安売り調べるレベルだぜ？」

こいつ、会社を私物化してる。

本物の王子は、んなこと言いません。そーゆーときは、「君と僕との愛の力さ！」的なことを言います。

「おら、くだらねーこと考えてねーで、ちゃっちやと着替えろよ。俺は下行つとくから」

「あのー……王川くん」

「ん？」

「読心術とかは……」

「取得してるか、ドアホ」

「えー！あんたが叶の！叶、変なことしてない？あの娘の空想癖、すごいから！」

「いえいえ。とんでもないです、お義姉さま。叶さん、すごくいい方で。仲良くさせていただいてます。」

「で、あんた、あの王川グループの社長の息子さんなんだって？すごいね！名前は？」

「王川碧と申します」

「あたし、叶の姉の倉坂^{くらさかのり}祈。よろしくー！よかつたら朝ごはん、どう？」

「いいんですか？では、お言葉に甘えて……」

「おねーちゃん！」

「おー！叶！碧くん、すごいね！かつこいいし！こりゃあ、叶が油断してたら、あたし、頂いちゃおっかな？」

お姉ちゃんが、ニヤニヤ笑ってる。王川くんは、「やだな」なんて笑いながら、朝ごはんを口にしている。お、王子様モードか！さつきまで腹黒ドSモード全開だったがな！

不本意ながら、王川くんの隣に座り、朝ごはんを食べ始める。

「ウチのシェフよりおいしいです！これ、お義姉さまが全部作られたんですか？」

「え？まーね。ウチ、両親共働きでさあ。家事は大体あたしがやってんの。こう見えて大学2年なの」

「いいな」叶は。こんなお義姉さまがいらっしやって」

「え？そ、そう？」

ニコニコ笑顔の王川くん。その裏に黒い気持ちが隠れてると思っただけ、こわいのなんのって。

お姉ちゃんは王川くんにベタ褒めされて照れてる。

「あ、叶！もう時間ヤバイ！」

「え！うわっ！もう8時じゃん！いくね、おねーちゃん！」

「ごちそうさまでした！お義姉さま！」

「はい。またおいでね」

「あれ、お前のねーちゃん？」

ちよ、口悪いな。二人になったとたんこれ？

「そーだけど」

「似てねーな」

「だから何！？」

それどころじゃないでしょ！？

遅刻寸前だよー！！

「セーフ！！！」

キキーツて音がなりそうなブレーキをかけて、教室到着！

「おはようございます」

後ろでは、王川くんが涼しげな笑みを浮かべている。

「きやーっ王川くうーん！」

「めずらしい！王川くんが遅刻寸前なんて！」

「申し訳ありません。ちよつと急用で、父の会社を手伝っていたものですから」

よくつけるよ、そんな嘘。

こいつ、詐欺にあつても、ぜったい詐欺し返して、金取り戻しそーなタイプだよ！

放課後。

時間の進みが速いかもだけど、そんなことは気にしな―い！
小説じゃあ、よくあることなのダ

「くだらねーモノローグやってねーで帰るぞ」

「！？王川くん、モノローグとか聞き取れんの！？」

そんな技、私しか出来ないと思つてた！

「あはは！そんなこと、出来るわけないじゃん、倉坂さん。おもしろいこと言つね」

につこりニコニコ王子様スマイル！

これじゃあ言い返せないよ！

「……お前さあ、俺の本心受け入れて付き合つてんの？」

「は？」

某喫茶店にて（ちなみに、王川くんは、生徒の目が届かないと判断したため、すでに裏モードです）。

私の前にはマロンケーキとミルクフィユ。王川くんの前にはエスプレッソコーヒー。大人だねえ。

「いや、フツの女はさあ、俺の本心見たら、すぐ逃げんぞ？ギャップありすぎだつて」

「そう？」

え、だつて、人間誰しも裏はあると思うよ？私無いけど。

「俺だつて、計算してんだよ？ほら、表向きの顔。ああやって女弄

んできたからよ。お前はそーゆーのないわけ？顔は悪くないし（ぼそぼそ）」

「すいませーん。弄んだのあと聞こえませーん。あと、店員さん、ティラミスひとつ追加で！」

「き、聞こえなかったんなら気にすんな」

「んー。私、計算苦手なんだよね。数学嫌いだし」

「そういう意味で言ったんじゃないんだけど……」

「別に王川くん自体が変わるわけじゃないしさー。私は気にしないよ」

「そっか……」

なんか、そう返事する王川くんは、何処か寂しげだった。なんだろう。

【おまけ】

「おい、叶。早く払えよ」

「え？王川くん払ってくれないの？」

「俺がいつはらうって言ったよ。せめて自分の分払え」

「えーと……マロンケーキとミルフィーユとティラミスと……」

自分の財布の中の小銭を計算してみても絶句。

「お、王川くん。私、数学苦手なんだ。この計算は間違って欲しい。てゆーか間違ってる！」

「1、2、3……お前あんだけいろいろ注文して、所持金300円はねーだろ」

「うわああ！どーしよ！ちよ、お願い！今日だけ奢ってー！」

「そこはさりげなく奢らせんのかよ。ツたく……」

スツと、王川くんの黒い財布から取り出されたのは、カード。

「あ、あのー。王川くん。私の目が間違ってなかったら、それ、黒いカードに見えるんだけど……」

「ん？ブラックカードがどうかしたか？」

「い、いいの？」

「あ？だいじょーぶだ。お前の姉貴にしっかり請求するから」
「この鬼王子！」

第1話 シンデレラは数学が苦手です（後書き）

叶を優位に立たせてみました！

叶は基本、底なしの明るさを持つ設定なので、取りあえずポジティブです。

碧は、落ち着いた二重人格キャラってイメージです。

叶の姉・祈は、叶の名前から連想しました。

姫↓願いを叶える↓叶

願い↓祈る↓祈みたいなw

第2話 シンデレラは恋路にサクラ咲かせます（前書き）

最終更新まさかの一ヶ月前・・・！

これからは真面目に書きます。ええ、書きますとも。（自信ないけどww）

第2話 シンデレラは恋路にサクラ咲かせます

「桜〜!!」

下校中。

校舎の周りは桜の花びらでピンクピンク!

ピンク好きの私にとっては嬉しい限りです! さくらあゝ、さくら...

げしっ

「r... いったあああ!」

今日も今日とてカツコイイ王川くん。桜に浮かれてた私の頭に空手チョップ。

いや、王川くんがやると、冗談抜きで痛いんですけど...

「お前心の声駄々漏れ」

「え、マジですか」

うつそおおお! じゃあ、じゃあ! 私の今までのモノローグは全部モロバレであつたと!! っきゃああああ!

もしかして、この間王川くんで行った喫茶店で、どうせ王川くんがおごってくれたなら、レアチーズも食べときゃよかったなーとか思つたことも全部...

「へえ... そんなこと考えてたのかあ」

「ひっ」

ユラリと王川くんが私に近づく。思わず後ずさり。

いや、だって、真っ黒いオーラ出しまくりだもん!

あれ? なんかいつもの王子様スマイル!?

え、ちょ、逆に怖いよ!! いつもなら喜ぶし、とろけそうになるけど、逆に怖いよ!!

そして、今のケーキの話は声に出してないよ!! うん、絶対!!

「あの……王川くん、やっぱり読心術……」

「ねえって言ってたんだろ？」

あ、やべっ

王川くん、手えケ。ンロウ並にバキバキいわしてる

「さて、と。叶……。覚悟しろよ」

「いや、ほんとすみませんでした。もう金輪際絶対言いませんから。いや、思いもしませんからああああ！許して……」

「つきやああああああ！」

それから、私の悲鳴は結構響き渡ったみたい

「ふわああ……。い、痛かったあ……」

王川くんに不自然な方向に曲げられた手はまだ痛い。

「あ？お前が、んなこと考えてるからだろ？」

「あ！そーだ！王川くん、明日土曜でしょ？クラスのみんな誘ってお花見しよー！」

「無理」

あ、即答ですか。

「なんで？せっかく桜綺麗なのに！」

「まだ満開じゃねーだろ」

「いいじゃん！みんなでお弁当持ってさあ。賑やかで楽しいよ？ほんとにだめ？」

背の高い王川くんに向かって上目遣い！

でもすぐデコピン決められて下向いちゃいました。

「ちえっ！じゃあ、私、家そこだから先行くよ！あとから入りたい！って知らないからね！」

たーっと夕暮れ道を一人、王川くんの返事も無視して走って帰りました。

……ったく。

叶、俺の彼氏って自覚あんのかよ。

みんなで、なんて嫌に決まってるのに。

・・・みんなで花見なんてしたら、どうせ俺の周りには女子が集まるだろう。

叶だって、友達とばかりわいわい喋るはずだ。

どうせなら、二人でやりたいのに・・・

「あー！もしもし、早紀なつ？明日暇？？」

今、私はクラス中の友達に連絡中！

メールでもいいけど、電話の方が、こういうときは早いよね。

「うん！そう、お花見ー！分かった！じゃあ、明日！」

ぴっ

電話切って、「中野早紀なかの」というメモ書きにチェック。

よし、あと半分！！

「つ、疲れた・・・」

やっとクラス全員終了・・・。

ほんとつかれた・・・。

王川くんには、「無理」の一言で切られちゃいました うえーん。

まあいつか。たまにはクラスみんなでわいわいやるのも！

さあ、寝ましょー！

「おーい、叶ー」

「あー！早紀、八重ちゃんやえ！早いねー！」

「そういう叶は王川くんの妄想でもしてたんでしょー？」

八重ちゃんニヤニヤ顔。

「してません！そして私がいつもするのは妄想じゃなくて想像です
！」

「・・・叶、それ一緒じゃない？」

何はともあれ、今日は遊ぶぞー！！

男子は向こうでブランコ取り合ってるし。．．．お前ら、幼稚園児か！！

私は女の子と恋バナ♪

「えゝ、みい、付き合ってたのゝ？」

「えへへゝ。早紀、気づかなかったの？」

「私も気づかなかったゝ」

「叶は鈍感だからなゝ．．．」

「わ、私だって好きな人くらい．．．」

ゝ！！やっちゃったああ！！

王川くんと付き合ってること、誰にも言っていないんだゝ！！

「えゝ！！！叶、理想の王子様見つけたの！？」

「二次元じゃないよね？？三次元よね？」

し、しまったあ．．．。王川くんから、バレたら周りがつるさいからって内緒にしとけて言われてるのに．．．。

「誰？誰？」

「え、う、その．．．」

「言っちゃいなよゝ！叶ゝ」

きやあきやあ、今日は騒ぎまくりましたとさゝ

「ねゝ叶ゝ！教えてよゝ」

「えゝ．．．」

みいこと、貝谷かいたにみりあ。帰り道一緒だから、しつこく聞いてきます。

「わ、私！近道して帰るね」

「あ、ちょ、ちよっと！」

昨日と同じように、みいも振り切って、家までダッシュ！

「ふええゝ．．．」

疲れたゝ。今日は騒ぎすぎたよゝ．．．。

夕飯食べて、お風呂入って。もうあとは寝るだけ！！

もう１１時ですかゝ。

よし！明日日曜だし、ゆっくり寝よう！

取りあえずベッドへダイブ！にしても、情けない声だな。私の声！と、そのとき。

私のピンクのケータイが「ワ。ルドイズマイン」の音を奏でた。またみいかなあ・・・なんて思いながらケータイを開くと・・・

「お、王川くん！」

王川くんからのメール。どうしたんだろう。こんな遅くに。

『俺と花見がしたかったら、１１時１５分、川原の桜の木の下』

それ以外は何も書いてないメール。だけど分かる。

王川くんは、私を待っていてくれる。

二人でお花見しようって誘ってくれてる。

パジャマからＴシャツに着替える。

髪はお風呂上りだから濡れたまま。

でも、乾かしてる暇なんてない。

シンデレラの魔法は、１２時には解けてしまう。

王子様といれるのは１２時まで。

「！王川くん！」

もう４月だけど、やっぱり、まだ肌寒い。

「おっせーぞ、叶」

「ご、ごめん」

「王子待たせるなんてどういう神経してんだよ」

「！？王子宣言ですか！！」

川原の桜の木の下のベンチ。

優しい風に桜が舞う。

私は、王川くんの隣に腰を下ろした。

夜の桜は、夜空の黒に映えて、昼間とはまた違う感じ。

「お前、寒くねーの？」

「え？わっ」

うつわー・・・なんか寒いと思ったら、私、コート着てないんだ・・

慌ててたから、Ｔシャツ一枚だよ・・・。

「おら、これ着とけ」

王川くんが私の肩に自分のコートを脱いでかけた。

「あ、ありがと・・・」

コートには、まだ王川くんの暖かさが残ってて。

きゅうつと私はコートを握り締めた。

「てか、お前風呂上がりか？髪濡れてるぞ？」

「王川くんが１５分って言うからでしょ？ドライヤー出す暇もなかったんだから！」

「今１５分だけど？」

「え？」

ケータイ確認。 11:15。

「え、嘘・・・」

じゃあ、王川くんは、寒い中、もっと前からここに居たんだ。

「あの、ありが・・・」

！！！！

目の前には王川くんの顔。口はもう開かない。

彼との距離はゼロ。

やつと王川くんが離れた。

「ちょ、わ、私、ファースト・・・」

「ふーん。じゃあ、ファーストが俺でよかったじゃねーか」

「いや、それはそうだけど・・・」

シンデレラの心にも、春はやってきました。

第2話 シンデレラは恋路にサクラ咲かせます（後書き）

グツダグダのお花見談。いや、季節的にもやりたかったんですよ？
はい、王川くん。嫉妬しましたww

いや、ヤンデレって訳じゃあないんですけどね？どっちかっていう
とツンデr（ry

ではまた次回！

第3話 シンデレラとテスト勉強（前書き）

約1年も更新停止…！！
申し訳ございませんでした！！

第3話 シンデレラとテスト勉強

「もうすぐ中間かあ…」

「え？もう！？」

「叶あんた勉強してないでしょ？」

「もう二週間前きってるよーん」

5月の中旬。

気づけば、中間テストは、もう目の前に迫っていた。

「いいなあ、早紀も八重ちゃんも勉強できて」

「叶は勉強しないのが悪いッ！」

八重ちゃんに数学の教科書で頭をぽすつとたたかれる。痛いッ！

「そーだよー？叶、中学のときから数学赤点だしさー」

「それ今言う！？」

わざわざテスト前に思い出したくもないことを言うかな、普通！

「お姉さんに教えてもらえば？」

「祈さんて、頭いいんでしょ？…叶と違って」

「え、最後の言葉って言う必要あった？」

お姉ちゃんか…

確かに、聞いてみるべきかな。

「というわけで…お姉ちゃん、数学教えろ」あ、無理」
早ッ！

妹の頼みをここまで無碍にする姉もどうかと思うよ！！

「あんた飲み込み遅いし、私は家事とか大学の課題とかバイトとかもあるし、ぶっちゃけめんどくさいからヤダ」

「酷い！とくに最後酷すぎる！」

ここまでではつきり言われると、逆ギレする気も起きない。
ラストとか思いつきり私情だったしね。

「…ていうか、さ」

「え？」

「王川くんは？頭いいんじゃない？あの子」

「あー…」

…「無理」と断られる様子が目に浮かぶ。

お姉ちゃんか他の人の前じゃ超猫かぶってるから、快く引き受けてくれるだろうけど…

「い、一応、話振ってみる」

多分無理だろうけど。

次の日の帰り道。

運良く王川くんと一緒に帰れた私は、テストのことをいってみたいことにした。

「王川君って、普段どうやって勉強してるの？」

「なんで？」

「いや、普通に頭めちやくちやいいし…」

「いや、俺勉強とかした事ねーけど」

…頭のいい人はいいですね、ほんとに。

まさか、頭いいって言っても、こんな次元で頭いい人だとは思わなかったよ！

「王川君、もしかして、授業で全部覚えてるの？」

「いや、授業は適当に聞き流してるけど？」

…今ほど恋人に殺意を覚えたことは、今までにも、そしてこれからもないことだろう。

「…どうして同じ人間なのに、こんなにも違うんだろう…神様はやっぱり平等じゃないんだよね…」

「いや、勿論お前がバカなだけだと思うけどな？」

「それ言う！？分かっててもそれ言う！？」

「事実である以上、仕方がないことだろ」

「うー…」

分かってるからこそ言い返せない。

「…なんなら、俺がお前の勉強見てやってもいいけど…」

「ホント!？」

これは願ってもいない展開だっ！

「その代わり俺んちで。どうせお前んちだと、お前、どうせ気が散って進みそうにないし」

「ごもつともです」

勉強してたはずなのに、ケータイいじってたり漫画読んじったりね！

「…意思弱いな、お前」

「また心の声漏れてた!？」

そろそろこの癖は直したい限りだ。

そんなこんなで、私は、王川君の家で勉強することになった。

…正しくは、教えてもらう、か。

「…いや、ある程度は理解してたけどさ…」

でかい!!

私の王川君の家に対する感想は、それだけだった。

お金持ち、ということとは知ってたから、王川君ち、立派だとは思ってたけど…それにしても、想像を絶する。

家って言うよりも、お屋敷って言葉が似合いそうだ。

お城なの？これはお城なの!？

「城じゃねーよ、早く入れ」

「…そろそろこの癖直す努力したほうがいいかな？」

「ある意味才能だけだな?…アホの」

「今アホって言った!ちっちゃい声でバカにした!」

部屋に入ると、その豪華さは、いっそう増した。

「凄い…」

「そうか？普通じゃねえの？」

「いや、ホント凄いよ…」

これを普通としれつと言い放てる王川君も。

そのとき。

「お帰りなさいませ、碧様」

後ろから、澄んだ声が聞こえた。

振り返ると、まさしくメイドさん、といった感じの飾り気のなく、おとなしい服装の若い女の人が立っていた。

「あら、こちらが、この間言っただけ彼女さんですか？」

「うん、まあそんな感じ。…叶、うちの掃除とか、家事とかやってくれてる水本さん」

あつさりと、王川君は、私を「彼女」と紹介した。

…私、今、顔赤くなつてないといいんだけど。

「あ、えつと…はじめまして、倉坂叶です」

あわてて頭を下げると、水本さんは、やわらかく微笑んだ。

「はじめまして。水本紫季と申します」

「水本さん、今日叶と勉強することになったから」

「碧様が勉強だなんて。はじめてじゃありませんこと？」

「たまにはいいんだよ、たまには！」

あとでお茶持つてきて、と辻村さんに言い残すと、王川君は、何事もなかったかのように、階段を上っていった。

「あ、き、王川君、まって！」

私は、慌てて王川君の後を追った。

「…で、これをxであらわして、こつちがy」

「…わかんない」

「…お前、俺の予想してた数倍頭悪いな」

「そりゃ王川君に比べりゃあね！」

「いや、一般的に見て」

「酷ッ！」

意外と殺風景だった王川君の部屋。机やベッド、本棚など以外にはノートパソコンや写真立て、あとはよく分からない難しそうな本だけ。

ひとつ、倒れちゃってる写真立てあるけど、起こさなくて良いのかな？まあ、また余計なこと言ったら怒りそうだから黙るところ。…どっちにしる、勉強も進まないし。

集中はしてるけど、大ッ嫌いな数学。一向に進まない。進むわけがない。

教えてもらうけど、全く分からない。

私が頭を悩ませていたとき、コンコン、と控えめなノックが部屋に響き、扉が開いた。

「頑張ってるっしやいますか？」

変わらない微笑のまま、水本さんが、手にティーカップを乗せたお盆を持ってたっていた。

「お茶をお持ちいたしました。…机の上に置いておいて、よろしいでしょうか？」

「ああ、ありがと」

王川君がお礼を言うと、水本さんは、ティーカップを机に置いて、失礼します、と言って部屋を出て行ってしまった。

「…そういえばさ、」

「何？お前、それどころじゃねえだろ」

「王川君と水本さんて、仲良いんだね」

「…なんで？」

王川君が、心底分らない、という顔をする。

「だって、なんか王川君、水本さんには頭上がないじゃん」

お礼言う、なんて、裏の顔のときの王川君じゃ、考えられないような行動だと思う。

「…別に」

「なんか、お姉さんみたいだね、水本さん」

「あー…まあ、俺がちっこいころから面倒見てくれてるし…」

…水本さんて、いったいいくつだ。

見たところ、まだ20代いくかいかないか。本人が若干童顔っていうのもあるんだろうけど。

「水本さん、確か…12歳くらいからここにいるんじゃないかってだけ」

「え、王川君が12歳のときから？」

「っていうと…今王川君が16として…4年…??」

「いや、俺じゃなくて、水本さん」

「水本さんが!？」

それ、12歳から働いてるってことじゃ!？」

「…あんま言うのってよくないけどさ…水本さん、12のときに、両親死んでんだ」

「え…」

なんとなく、聞いてはいけない、ということ、本能が伝えている。

「あの…」

「まあ、言いふらすんじゃないや、叶も知ってたほうがいいだろうし…」

王川君は、そう前置きして話した。

水本さんは、12のとき、交通事故で両親を失ったらしい。

親戚の家をたらい回しにされ、中学生が普通に働くわけにも行かず、どうしようかと迷っていたとき、王川君の子守、という絶好の職を見つけた。

まだ3歳だった王川君は、両親が仕事で忙しかったため、その遊び相手として、水本さんが雇われた。

そして、大人になってから、水本さんは、メイドとして正式に働くようになった。

「…とまあ、掻い摘んで言えばそんなとこ」

「だから、お姉ちゃんと弟みたいな関係なんだ」

「う…」

王川君が、なんとなく赤くなった。

「そ、それより、数学…これはBとAが会合う時間が…」
照れてるのを隠してる…の…かな？

数学に没頭しようとしてる王川君。

「…可愛い」

「は？」

洋風の家とは不釣合いな桜の木の葉が、はらりと落ちた。

第3話 シンデレラとテスト勉強（後書き）

更新大変遅くなってしまってほんとに申し訳ございませんでした！
恋愛小説なんてめったに書かないもので… ネタが… なくて…
これからはもうちょっと更新できるように頑張ります。

さて、今回は、暗いのか明るいのか^^；

水本さんは、個人的にはお気に入りのキャラなので、これからもちよこちよこ登城してもらいたいです。

そして、叶はアホの子です（笑）

その分国語はよさそうですけどねw… 持ち前の空想癖でww

次回はテストの話になるかと思います。

そろそろ新しいキャラもバンバン出したいなあ。。。 もっと少女マンガみたいな展開にしたいけど、私の文章力では無理ですw

第4話 シンデレラと隣の国の王子様（前書き）

以前の更新から4ヶ月…！！
更新遅くてホントすみません・・・！！

第4話 シンデレラと隣の国の王子様

「な、70か…」

「叶、普段からちゃんと勉強してないからだよー」

「だつてえ…」

2日間にわたるテスト終了し、今日からテストが返却される。

私は70点。友達の八重ちゃんは、80点。

八重ちゃんは、柔道部女子期待の一年生。部活も大変なのに、すごいなあ。

王川君との勉強で、なんとかテストを乗り切ったはいいけど、精根
尽き果て、もはや私は生きる屍と化していた。

「ていうか、叶、平均は余裕でとれてるじゃん。よかったね」

「う…うん。あ、それより、八重ちゃん、今日部活？」

「うん」

はあ…八重ちゃんは部活があ…。

私は、あきらめて、一人で校門へと向かうことにした。

「八重ちゃんにはああいったけど…」

私は、スクバの中から、数学の答案を取り出した。

そんなによくないのは確か。

苦手教科だもん。

けど…

「いつもより…マシだよな…」

不思議と、いつもより解けたのだ。

王川君との勉強で疲れてしまい、結局家では大して勉強してなかったけど…。

「王川君、教えるのも上手かったもんなあ…」

「じゃあ、礼のひとつでも言うべきだよな」

「王川君!？」

後ろを振り返ると、王川君が立っていた。

足音ひとつ立てないで人の背後を歩けるとか、あんたは忍者か!!

「でも、ホントありがとう!おかげでだいぶ出来たよ!」

「まあ、赤点ぎりぎり回避状態からだ、たった2週間ほどでたいした進歩だよな」

「なんで私の点数知ってんの!？」

お母さんたちにすら秘密にしていたのに!!

「ふーん。まあ、よかったんじゃないの?あがったんだろ」

「うん、それはそうだけど…」ところで、王川君はどうだったの?」

私の勉強につき合わせちゃって、王川君の点数が下がってたなら、申し訳ないもん。

「いや、数学は100点」

…確か、数学の先生、100点学年で一人。その下は93点とか言ってたよね…。

あんたか、ダントツでトップとってたの。

「ちなみに…他教科は…?」

「社会・英語・理科100点。国語は98だっけ。なんか問題の意味がちよっとおかしかったやつ」

…天才がいた。

今回の国語は、相当に難しかったはずなんだけどな。

国語は得意だけど、80点ちよっとまでしか取れなかったし。

「大体、お前の勉強手伝った程度で俺が成績落とすか」

「で…ですよね!…」

なんか…落ち込むなあ。この人の点数聞くと！！
自分の努力が容赦なく踏みにじられてるような気がする！

「まあ、いつか。もうすぐ今週も終わるし」

今日は水曜だから、もうちよつとで休日だ。

「休み程度で落ち込みから抜け出せるのか、お前は」

折角の休みなんだから、気兼ねなく遊ばないとね！

「じゃあ、私この辺で！ほんとにありがとう！王川君！」

「ああ、うん」

私は、王川君に向かって手を振ると、家へと歩いた。

「ふーん。じゃあ、王川君のおかげで、そこまで取れたの？」
「うん！」

夕食中、私は、お姉ちゃんにテストの結果を報告した。

「…まあなんにせよ、王川君の手にかかっても、叶は70点までしかいかないってことか…」

「なんでそういうことかなあ！！」

私の周りの人間がレベル高いだけなの！！

「まあいいじゃん。あがったんでしょ？これを機にちよつとは勉強しなさいよー」

「うう…はい…」

しぶしぶ返事をする。

勉強面においては、祈お姉ちゃんは、いつも塾でものトップクラスにいた。

これ、お姉ちゃんが生まれるときに、私の学力全部吸い取って行っ
たんじゃないだろうか…。

「それはそうと」

お姉ちゃんが、食べ終わった食器を下げながら言う。

「あんたが中学のとき、隣に住んでた野中君っているじゃん？今週末に帰ってくるってさ」

「和馬君が!？」

野中和馬君――

私が小5のとき隣に引つ越してきて、よく遊んでた同級生の男の子だ。

中学の間も割りと仲良くしてたけど、和馬君は、県外の高校に進学を決めたため、学校の近くで一人暮らしを始めたのだ。

おばさんとは、まだちょこちょこ喋ったりもするけど、和馬君とは、数ヶ月会ってない。

どんな感じなんだろう? もう付き合ってる人がいたりとかもするのかな?

「野中母曰く、今週の金曜日、野中君の学校、創立記念日で休みなんだって。よかったね」

「うん! 数学のテスト自慢できる!」

「いや、自慢できるほどの点数じゃないと思うけど…」

「私の中では最高の!」

お姉ちゃんにそう言い返しながら、私は、スケジュール帳の金曜日に、ピンクのマーカーで印をつけた。

数日後の放課後。

王川君と別れた帰り道。

スクバの中で、ケータイが震えた。手探りでケータイを探す。

「もしもし」

「よお、叶! 久しぶり!」

その声を聞いたとたん、私は、思わず言った。

「か、和馬君! 久しぶり! あ、今日帰ってくるんでしょ? 何時くらい?」

「もうすぐ駅着くぞ! 今3時半過ぎだから…大体4時くらいかな」

「ほんと？じゃあ、私駅に会いに行つていい？」

「あ、マジ？叶は時間にルーズだからなあ…遅れんなよ」

「そ、そーゆー和馬君こそ、中学のときは遅刻24回の常習犯だったくせに！」

『なんでそういうことは正確に覚えてんだよ！つたく…今はもうしてねーっつーの』

「あはは、ごめんごめん！」

『…やべ、そろそろ電車出るから切るな！じゃあな！』

プツン、と電話が切れる。

「和馬君…ほんとに帰ってきたんだあ…」

懐かしい友達との再会に、私は、少し心躍らせていた。

「…4時ならもうすぐ着くよね…」

駅には、学生さんがたくさんいた。ちょうど下校時刻だもんね。

和馬君が帰つてくると知った私は、電話をもらってから直接駅へと向かった。

「折角だし、制服見せて驚かせてやるーっ」と

昔は散々ちんちくりんとかいって、からかわれたからな…。わ、私そんなにちっちゃくないもん！

そのとき、後ろから声がした。

「叶！」

「和馬君！」

久々に会った和馬君は、中学時代のサッカー少年、という印象はそのまま。あの人懐っこい笑みも変わらない。

「相変わらずだなあ、叶」

「和馬君も、相変わらずサッカー少年って感じだよな」

「いや、相変わらずちんちくりんだなーって」

「わ、私そんなちっちゃい！？」

それでも、身長は平均的はずなんだけど…

「ていうか、あの妄想癖も治つてねえの？」

「妄想はしてないって!」

せいぜい空想ですよ!

「いやー、駅前もあんま変わんねえな!」

「そういえば、和馬君、今日は、どうしたの?急に帰ってこようなんて」

「ん?あー、ちょっと友達の顔見にとか思っで。ほら、高校入って、サッカークラブの皆、どうしてっかなーって」

「へえー」

和馬君のいたクラブは、かなり強豪らしくて、そこそそ有名。そんなわけで、中学に入ってから、そこでサッカーを続けていると言う人は結構いた。

「でさあ、なんかこのへん、おもしろいことかねえ?」

和馬君が、急に言い出した。

「お、おもしろいところ!」

「なんか、話のネタになりそうなどこ。別に、面白い話でもいーんだけど」

「おもしろいことかあ...」

おもしろいこと.....

.....こういうのって、考えると見つからないなあ...

「あ、」

「何?なんかあった?」

「祈お姉ちゃんが、ついに、男子10人斬り突破しました!」

「は!?!」

「いや、あの、祈お姉ちゃんが、高校入ってから今までのカウントで、男子通算10人に告られて、ものの見事に10人ともフっちゃいました!」

「お前のねーちゃんすげえな!...てか、それ、お前、ねーちゃん

に怒られんじゃねえか？」

「……………恐らく怒られるで済まないと思う」

いや、まあ、お姉ちゃん、顔も頭もいいからなあ……

……なんか王川君とかぶった。デジャヴ？

「あれ？倉坂さん」

……噂をすれば何とやら。

「王川君！どうしたの？こんなところで」

「俺はちよつと用事で。倉坂さんこそ、どうしたの？」

……裏表の差が激しすぎる。

王川君、普段二人きりのとき、私の前でこんな爽やかに笑ったこと一回もないよ！？

「あ、えーと、私は和馬君……えーと……昔の友達に会いに来てて……」

「うわ、めちやくちゃイケメンじゃん！何！？叶、彼氏？」

和馬君は、なんで王川君前にテンション上がったのか、私には理解不能だ。

女子なら分かるけども！

「あー、いえいえ。俺は、倉坂さんのクラスメイト。王川って言います」

「あ、俺、野中！よろしくなーっ！」

……あー、そつか。一応付き合ってることは極秘か。

まあ、和馬君の性格考えたら、うっかりばらしかねないからなあ。

「じゃあ、倉坂さん。俺はこれで」

「う、うん！バイバイ」

王川君は、軽く手を振ると、さっさと行ってしまった。

……彼氏いるのに、ほかの男子と二人つきりとか、私、王川君に悪いことしちゃったかしんないなあ……。

「あ、あの、和馬君、このあとどうするの？」

「ん？あ、俺？んー…サッカーチームの友達んどこ。歓迎会してくれとかさー、大袈裟だよな！」

和馬君が、ははつと笑う。

それから、ちよつと真面目な表情になった。

「なあ、叶、王川追っかけなくていいの？」

「へ？なんで？」

「いや、なんか、もうちよつと喋りたそうな感じしたから」

「えーと…何を根拠に？」

「勘？それかなんか、本能的なもの」

うわあ、和馬君の勘怖っ！

超当たってる！！

「えー、あー、でも…」

「いいじゃん。俺とはまた電話で喋れるし。行ってくれば？…それとも何？相手が理想の王子さま過ぎて、声掛けられないとか？」

「そ、そんなことないってば！…じゃあ…お言葉に甘えて」

「ん。ありがとな！」

「こちらこそ！じゃあ、歓迎会、楽しんできて！」

私は、和馬君と別れると、全速力で王川君の後を追った。

「まだそんな遠くへは行っていない筈なんだけど…」

王川君がここから向かうのって、どこだろう？

まだまともにデートもしたことないから、そんなことすら分からない。

「…あ」

そのとき、少し入り組んだ道を曲がる王川君の姿を発見した。

「王川君！…！」

「…叶？」

声に気づき、王川君が振り向いた。

「あの、さっきはごめんなさい…」

とりあえず、ぺこりとその場で頭を下げる。

「…は？」

王川君が怪訝な顔をする。

…ん？

なんか、辻褄合ってなくない？

「え、いや、あの…ほら、あの…い、一応王川君って彼氏が居るのに、私、和馬君と仲良くしちゃってたから…」

「で、俺が嫉妬してるとでも」

「えーあーうー…」

「別にあんな程度で嫉妬なんてしねえけどな？」

「あーそくだよねー…ってええええ！？」

誠心誠意をこめて頭を下げた私の心を返せ！

「いや、告白してきたの叶だし。つか、何？今更誰かに寝返んの？」

「いや、そんなこと一言も言っていないじゃん！」

この人はなんなんだ。どこまでSなんだ。

彼女を苛めてそんなに楽しいか。

「でもまあ…名前はちよつと不満…かも、な」

「名前？」

王川君の言葉を、思わず聞き返す。

「いや、ほら…お前、あいつのこと下の名前で呼んでたし、俺は叶を下で呼んでるし…」

「えー…あの…どどういうこと？」

王川君が何か言った。

その台詞を言ったときの王川君は若干顔が赤いようにも見えて。夕日のせいかもしれないけれども。

次の日。

「王か…じゃなくて、あの、碧君！プリント落としたよ?。」

「ああ、倉坂。ありがとう」

じゃあ、といって、王川君もとい、碧君が廊下の曲がり角の向こう側に姿を消した。

「…叶、王川と何かあったの?。」

「んー…ちよつとだけー…」

私の隣にいた八重ちゃんは、よく分からないって顔をして、首をかしげた。

ほんの少し、だけど、碧君との距離が近づいた気がした。

第4話 シンデレラと隣の国の王子様（後書き）

なんだか、前書きで謝罪ばかりしてるような気がする…

はい、こんにちは！というか、お久し振りです！

えーと、なんか嫉妬じゃないけど、やきもち焼いてる碧が書きたくて…書いてるうちに、自分が恥ずかしくなってきたちゃって、随分色々カットしました。。

それでは、次話も宜しくお願いします！

第5話 王子様の夢（前書き）

受験勉強の合間に投稿です。

第5話 王子様の夢

『碧は凄いなあ』

『勉強も運動も、なんでも俺より上だ』

『本当に、碧は――』

――俺の自慢の弟だよ』

「ッ！」

勢いよく体を起こしたため、脳が覚醒した。目覚めたばかりの顔に、容赦なくカーテンの隙間から差し込む日光が当たる。

「……夢、か……」

誰に言うわけでもなく呟いて、もう一度ベッドに潜り込む。

「嫌な夢……」

ぎゅっと目を瞑りなおしたが、一度覚醒してしまった脳が、二度目の睡眠を許さなかった。

仕方なく、布団の中でごろりと寝返りを打った。

――兄が俺の近くに居たときの夢。

時折見るのだ。

あの時、誰もが、碧を王川の跡取りにすると予想した。

しかし、父はその予想を裏切り、無能な兄を、正式な跡取りとした。跡取りという地位を取られたことは、別に構わなかった。

まだ幼かった碧にとっては、それがどれだけ価値のあるものか分らなかったし、分かった今となっても、少しも欲しいと思わない。

現に、碧は別段、王川の跡取りになりたいと思っただけだ。

ただ、碧は、兄に対して、劣等感を抱いていた。

碧が、学力的にも、運動能力的にも、兄より劣る、と考えたことはない。事実、劣ったことがないのだ。

周囲も、普通の子供だった兄よりも、異常なまでによくできた碧の方を評価した。

兄はいつも言った。

『碧は凄いね』と。

兄が碧を悔しがったことも、妬んだことも、恐らくほとんどないだろう。

それが、碧にはなぜかわからなかった。

弟のほうが上にいるというのに、まったく何も感じていない兄が全く分からなかった。

だから、碧は、兄に劣等感を抱いたのだ。

「…やめよ」

ずるり、と重たい体を引きずって、ベッドから降りる。

そして、そのまま部屋を出た。

「あら、碧様。おはようございます。随分お早いですね」

「んー…あー…まあ、目が覚めたから…」

朝ごはんを用意してくれている水本が、碧に会釈した。

「朝ごはん、もうちょっとお待ちくださいね」

今日はオムレツとサラダですよーなんていいながら、いつもどおり、ニコニコとテキパキと朝食の準備を進めていく。

「…碧様、顔色が優れないようですけど、何かありましたか？」

碧の向かいの席にすわり、碧と共に朝食をとっていた水本が碧に問いかけた。

テーブルは、無駄に大きくて、二人で食事するには広すぎて持て余している状態だ。

「いやな夢でも見たんですか？」

「んー…」

適当に受け流して、トーストにかじりついた。

兄貴…か、…最近、会ってないよな。2年…いや、俺が中1のとき以来だから、3年か…

叶とかと喋るようになってから、すっかり忘れていた。

海外にいたとか聞いたけど、今頃何してんだか…

「…様。碧様！」

「え？」

目の前では、水本がテーブルから身を乗り出していた。

どうやら、碧は、ぼーっとしていて、無視してしまったようだ。

「全く…聞いてらっしゃいました？」

「え、あ…ごめん、もう一回」

「もう…お味、どうですか？」

「ああ、美味しいです」

「…適当に言ってますん？」

「言ってる言ってるない」

ひらひらと手を振って誤魔化す。

「…今日の夢、蒼馬様そつまですか？」

「…！？」

碧は、飲んでいたコーヒを嘔き出しそうになった。

…ああもう、どうしてこの人は、こうも変なところで鋭いのか。

「えー…まあ…てか、水本さん鋭すぎねえ？何、エスパー？」

「何年碧様にお仕えしていると思ってますの？」

「12のときからだったから…8年？…いや、もっとか」

「女性の年齢から推測するのは、いかがなものかと。私ももう、一応成人したわけですし」

「水本さんが言わせたんだろうが。…つか、兄貴も同じ年だから…あいつももう、24なんだ…」

「それは私に対するなんでしょう。嫌味、ととってよろしいんですか」

水本さんがいたずらっぽく笑った。

「だから違うって！単純にあいつの年齢考えただけ！」

「ふう…まあ、元気になったんならいいんですけど」

一足先に食べ終えた水本が、席を立つ。

「あんまり暗い顔していると、叶様が心配しますよー？」

「ん…」

あいつの前で暗い顔したところで、あいつがそれに気づくかどうか。筋金入りの鈍感だしな。

「ごちそうさま」

碧も続いて立ち上がる。

「いってらっしゃいませ」

「行って来ます」

いつもどおりの挨拶をして、門を潜り抜けて、碧の日常は、今日も始まった。

「あ、おはよー、王か…碧君！」

「ああ、おはよ」

登校中に、叶とぼったり鉢合わせ。

「珍しいねー。碧君がこっちの道って。いつもはもう一個先の門で曲がってなかった？」

「珍しいなー。叶がきつちり起きて寝癖まで直して学校来るなんて」

「ええ！？酷くない！？さり気に酷くない！？ていうか、私、ちゃんと直してから毎日学校来てるもん！」

きゃーきゃーと一人賑やかに反論を並べ立てる叶に、碧は、なんと

なく笑顔になった。

「…お前、似てるよな」

「へ？誰に？」

「別に？」

「そこまで言っって言わないの！？やだ、気になる！超気になる！おーしーえーろー！！」

「うん。絶対嫌」

「何そのいい笑顔！！」

「あれ、倉坂。学校遅れるよ？」

「あれ、もう表モード！？」

——似てる。

基本素直で、鈍感なくせに、変なところで鋭い。

水本さんか兄貴か。

俺のすぐ近くにいるやつに、叶はなんとなく似ているのだ。

「どっちかつつーとあいつの方かな…」

本当に素直で、素直すぎる蒼馬に。

自分には絶対にもてない、そんな性格をもった兄に。

「えー、何が？」

「え？なんのこと？それより倉坂、遅れるよ？」

「ああもう！碧君のせいだから！！」

…まあ、つまるところ、こいつといると、なんとなく落ち着く理由。微妙に分かったかもしれない。

第5話 王子様の夢（後書き）

碧に視点を置いて書いてみました。

碧は、水本さんがやって来るまでは、遊び相手は兄だけで、水本がやってきてからは、ちよつと世界が広がった感じです。

だから、水本さんにもものすごく懐いているのかなあ。子供のときはもつとつっけんどんというか、ちよつと暗くて、何考えてるのかわからないような子供でした。そのくせ何でも出来るから、同級生には結構評判は悪そうですが、大人には可愛がられてました。だから、素直にぽんぽん色々言ったりとかできる兄・蒼馬には、なんとなくジェラシー感じてました。

…というイメージ↑

実際のところはまだそんなに考えてないですけど、大雑把にはこんなイメージです。

蒼馬は同級生にも好かれそうな奴ですね。またそのうち出したいです。

碧が叶と出会ってから、素の自分が水本さんや家族以外にも出せるようになって、もつと違った感覚になってきているのかもしれない。

それでは、また次話も宜しくお願いします！

受験勉強してきます！

第6話 シンデレラと小説家

「…というわけで、近々文化祭があります」

とあるホームルームの時間。

教壇には、いつもの担任の先生ではなく、学級委員長の牧田鈴歌^{まきた すずか}が立っていた。

「えーと、今年も、昨年同様、各クラスより出し物がありますので、うちのクラスはどうするか。意見を聞かせてください」

委員長が、手元のプリントから目線を私たちに移した。

「はい」

最初に手をあげたのは、みいこと貝谷みりあ。

「喫茶店とかは？アルバイトっぽくて、楽しいでしょ？」

黒板に、書記の西山君が「喫茶店」と綺麗な字で書く。

「ほかにはありませんか？」

「あ、委員長。質問ー」

そう言って手を上げたのは、中野早紀。

「体育館って使えるの？舞台とか…」

「一応、限られた時間だけなら借りれるよ」

「ほんと？じゃあ、演劇で！」

黒板に「演劇」と書き足される。

「へえ。早紀、なかなか面白そうなの意見してくれたねー」

私の後ろの席で、八重ちゃんが言った。

「うん。面白そうだよねー」

「喫茶店も悪くないけど、なんかほかのクラスとかぶりそうだし」

「倉坂さん、塔本^{とむもと}さん。喋らないでね」

ひやつとして、前を向くと、委員長がこっちを見ていた。

「う…はい」

「それから、女子の意見ばかりなので…男子の方はどうですか？」
委員長が男子のほうに目を向けると、男子は、気まずそうに視線をそらした。

……まあ、こういつとき意見考えてなかったら、いざ当てられたとき気まずいもんね。

「き、王川くんとか…どう思いますか？」

委員長が碧君に話を振った。

「え？俺ですか？」

碧君が話を振られて、ぱつと顔を上げる。

「えーと…」

後ろのほうで、女子がこそそこそと何か言ってるのが聞こえる。

う…碧君は渡さないもん！…まあ、付き合ってるの向こうは知らないっていうか、こっちが隠してるんだから仕方ないんだけど。

「演劇とか…楽しそうだと思いますけど…」

「ほんと！？」

早紀が目をきらきらさせた。

「うん。皆で大道具作ったりシナリオ考えたりとか、結構面白いと思うけどな」

早紀がだよね、だよね！とあおる。

むー…なんというか、碧君は私のものだもん！！

そして、ホームルームも終わりに差し掛かった頃。

「えーと、大体で尽くしたので、このあたりで多数決を取らせていただきます」

結果は…

演劇に決定！

「では、2年3組の出し物は、演劇ということに決定しました。演

目など細かいことは、また後日に話し合います」

委員長が自分の席に戻ろうとしたとき、ちょうどチャイムが鳴った。

「あ、叶！安藤は？」

「安藤さん？」

帰ろうとしたとき、早紀が私の元にやってきた。

「どうやら、私の席の近くの席の安藤さんを探していたようだ。」

「あちゃー…もう行っちゃったかー」

「どうかしたの？」

借りてたものとかあったのかな。

「今日決まった演劇さ、あれ、折角だから、台本、安藤に頼めないかなあ」

安藤…由利恵ちゃんだったけ？といえば、テニス部所属だ。

うーん…なんだか、そういうイメージじゃないんだけどなあ…

「安藤さんって、そんなに国語できたっけ？」

「いやいや、国語とかじゃなくて、安藤さ、あのこ、小説家志望なの」

「え？そうなの？」

テニス部所属って言うから、自然とスポーツマンがイメージがあつて、なんだか全然想像と違った。

「うん。だから、頼もうと思ったんだけど…叶、ちょっとテニスコートまで付き合ってくれない？」

そんなわけで、私は、早紀に付き合つて、安藤さんの元へ向かうことになった。

「あ、いた！おーい、安藤〜！」

「あれ？早紀！」

安藤さんは、一緒に練習していた、黒髪の女の子（一年生かな。すごく綺麗な子だ）に断りを入れると、私たちのところまでやってきた。

うーん。部活見学なんて、八重ちゃんの柔道部の見学に付き合つて

以来だから、なんだか新鮮。

（ちなみに、八重ちゃんも柔道部で現在女子エースです）

「ごめんね。練習中に」

「いいよ！今日、男子も先生も居ないから、結構緩いし。で、何？」

「えーと、今日の演劇なんだけど、よかったら台本書かない？委員長にはあとから言っとくし」

「え？いいけど、私でいいの？」

「あ、早紀、安藤さんのこと凄く推してて…安藤さんだからこそ、だと思っよ」

「にやー！叶ー！！」

私が言うと、早紀にぽくすかと頭をたたかれた。

私の言葉を聴いて、あっけにとられたような顔をしていた安藤さんだったが、途端にくすくすと笑い出した。

「早紀も倉坂さんもおもしろいねー。分かった！頑張るよ」

快く引き受けてくれた安藤さんは、じゃ、と言って、ラケットを持ち直すと、コートへ戻っていった。

「おっと、その前に、倉坂さん！」

「ふえ？」

戻ろうとした安藤さんが留まった。

「そんな、堅苦しく呼ばなくて良いよ？んー…私、自分の下の名前は苦手だから、安藤って呼んでくれれば良いよ！」

「えと…じゃあ、私も叶でいいよ！」

「ほんと？じゃあ、よろしくね、叶！」

そういつて、手をひらひらと振ると、安藤は、こんどこそ、コートに戻っていった。

「つてことがあつたんだよー」

「ふうん」

早紀と別れてから、私は、碧君と帰っていた。

待たせちゃったことに少し怒った碧君だったが、早紀たちといった

ことを言つと、それ以外は特に何も言わなかった。

「安藤つて、すごいかつこいい女の子だよねー。八重ちゃんと似てる!」

「ふうん」

「つてか、ふーん、以外に何か言つてよー!」

「んー…安藤つてそんなキャラだっけ?」

「だから、今それを知ったから、その話をしてるんでしょー!?!」

「んじゃ、俺こっちだから」

「あ、待つて、逃げるなー!」

——…俺の前で俺以外をかつこいいとかいうなよ。

碧は、なんとなく心の中で呟いた。

「…この鈍感」

「え?」

「じゃあ、倉坂、また明日ねー」

「え、ちょ、表モードとか卑怯ー!」

でも、そんな君が、一番かつこいいの!

第6話 シンデレラと小説家（後書き）

テスト前投稿！…ええ、勉強もしてますとも。

ぶっちゃけ、つながりの回です（（

安藤や委員長は結構お気に入りキャラなので、また番外編とか書くことがあったら、主人公として使ってみたいなーとか考えてます。では、また次話でお会いしましょうー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8378j/>

彼は王子さまっ！

2011年9月5日16時39分発行